

物故された本會の功勞者

○
道路改良會幹事 中好

大正八年三月一日、麿町區外櫻田町の内務大臣官邸で本
會の發會式を擧げてから恰度十一年目、十年一と昔と言ふ
ことがあるからモー既に昔のことゝ爲つた、此十年間に本
會は隨分活動し斯界に貢献したものだ、併しその多大の成
績を收め得たのは畢竟會務執行機關である理事その人が宜
敷を得て眞剣に活動して呉れた賜と言つて可い、其の功勞
ある理事であつて十年間に物故された人々も尠くない、い

石黒五十一氏



安政二年六月。東京に生る。明治十一年東大土木工學科卒業。十二年工學修業の爲め三箇年間英國へ留學。十六年歸朝内務省御用掛。十七年文部省御用掛兼勤、東大理學部講師。内務四等技師。十九年海軍技師兼任。二十四年工學博士の學位授與。三十年土木監督署技監。三十一年海軍技監。三十九年依願免官。四十年貴族院議員。四十一年錦雞間祇侯被仰付。此間鐵道會議員、震災豫防調査會委員、道路會議々員、東京市道路評議會議員と爲る。大正十一年一月十四日薨去。

本會副會長として活動された人、其の官吏生活中に於ける功績は、略歴の示してゐる通りであつて筆者が茲に言ふ迄も無からう、民間事業にしてもあの三池礫港の計畫者とし宇治川水電の計畫と言ひ澤山な事業が殘されてゐる氏の功績は關西商工業界に今でも讃されてゐる位だ、本會が執行した東海道や山陽道の道路改良宣傳旅行には老軀を提げ先頭に立つて活動された、京都や長野縣下に於ける宣傳にも矢張り出演して道路改良の必要を力説されたものだ、山陽道旅行のときは箱型自動車に納まつて一行を指揮され、誰れ言ふとなく阿彌陀堂と敬稱した杯は今も同行のものゝ話題に供せられてゐる、其の言ふ所は政黨政派を超越して眞に道路の改良が國民經濟の爲に必要であつて、何れの内閣でも之を計畫し實行して呉れば十分だと言ふ意見であつて、貴族院の一政黨に身をおかけた氏としては不思議な程の意見を持たれた、山陽道も今は漸次改良されて氏が八ヶ間敷力説された長關國道なども立派なものに爲つてゐる、氏も亦地下で快欣されて居るだらう。

近藤虎五郎氏

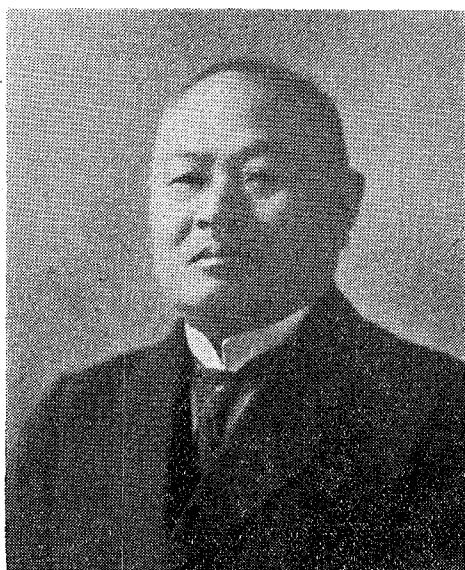
改良事業調査のときなどは、例の牧博士を指揮して設計立案の任に方つた。氏は主として土木事業の計畫やら技術の監督に従事された關係で、土木事業其のものを残されても居ないが、今でも地方技師の過半は氏の指導を受けない者は無い位に子弟を愛育されたものだ。

佐藤鋼次郎氏



慶應元年六月、新潟縣に生る。明治二十年東大工科大學卒業。二十三年技師試補。内務五等技師。二十八年内務技師。三十二年工學博士の學位授與。三十五年萬國航海會議參列。三十九年歐米各國視察。四十四年鐵道院技師兼任。大正六年東大工科大學教授兼任。十一年七月十七日薨去。

本會創立當時から理事として活動された人、東京市路面

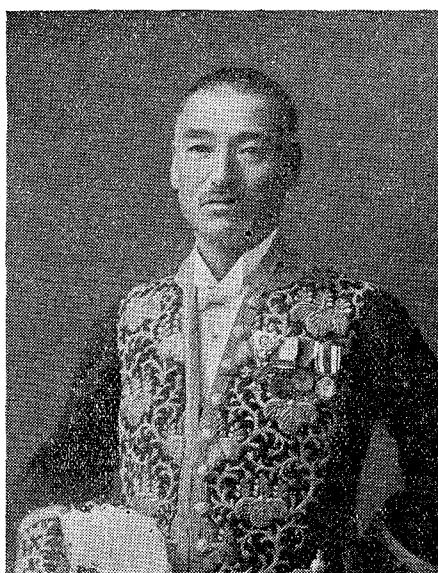


比田孝一氏

文久二年四月。東京に生る。明治十六年士官生徒。十九年砲兵少尉。二十二年同中尉。二十五年同大尉。二十六年獨逸國留學三十年砲兵少佐。三十一年歸朝。三十四年參謀本部々員。砲兵中佐。三十五年陸大兵學教官兼任。三十七年砲兵大佐。三十九年下關要塞砲兵聯隊長。四十年重砲兵第五聯隊長。四十五年陸軍少將。陸軍技術審査官。清國駐屯軍司令官。大正三年重砲兵監。五年陸軍中將。六年待命。十二年九月十八日卒去。

本會の創立が國防義會の方面から起つた關係で氏は創立當初からの理事であつた、軍人とは言ふものゝ其の型を破つて政治家肌の人だつた、常に軍政改革の意見を主張し、

今世間で言ひ囁かれてゐるやうな手綏いものでなく、徹底的のものであつた、夫れは多く本會の理事會で雑談的に語られたが夫れに就ては著述がある、本會が京都で開いた講演會では二時間に亘つて、氏獨特の熱辯を振つた扱は、今も筆者の耳底に残されてゐる。



明治元年十一月。東京に生る。二十六年東大工科大學卒業。一年志願兵服役。二十八年土木監督署技手。二十九年土木監督署技師。三十八年朝鮮へ差遣。三十八年愛知縣土木技師。愛知縣技師。三十九年統監府技師。四十三年宮城縣技師。四十四年内務技師。大正九年歐米各國視察。十三年四月二十四日卒去。

始め評議員として本會に關係され、其の資格で東海道旅行に參加し、例の江戸辯で改良宣傳に之れ努められたものだ、大正十四年理事に當選し近くは山陽道改良計畫やら四

國九州地方に於ける國道改良計畫の決定に盡力された。

堀田 貢氏



創立當時から理事として活動された人、併かも常務擔任の理事として會務の進展を圖られ其の功績は曾て筆者が本誌で紹介した通りであつて、當時は恰も道路法實施の爲に多忙を極めてゐたが、夫れにも拘はらず實業界や官界の重鎮を歴訪して創立事務に奔走されたことは今更言を俟たない、従つて本會の執行した事業の大部には必ず關係された。石黒氏の後を襲つて副會長と爲り益會務に熱心され、病を得て療養されて居たときでも、筆者等を宅に呼び寄せ、此頃は餘り會務に新味が表はれてゐないぢや無いか、官吏と言ふものは、唯だ何事をしなくつても済むものだ、又夫れを爲さむとすれば容易に出来るものだ、ドードーだ、改良會のことでも公事として役所の仕事の一つと思つて奮勵したら可いぢやないかと言ふ調子で、常に鞭撻された位に熱心であつて、本會としては忘るゝことの出来ない恩人だ。

明治九年一月、福島縣に生る。三十七年東大法科卒業。三十八年千葉縣事務官。三十九年神奈川縣事務官。四十一年茨城縣事務官。四十三年内務書記官。四十四年内務省參事官兼任。大正二年内務大臣秘書官兼任。四年京都府内務部長。六年歐米各國視察。六年内務書記官兼内務監察官。七年内務省土木局長。鐵道院理事兼任。十一月警視總監。内務次官。十二年退官。十四年二月三日卒去。